

- ▼『東方』300号より
一 文化を横断するための画期的「地図」
▲ 榎本 泰子

『東方』三〇〇号より

文化を横断するための 画期的「地図」

榎本 泰子(中央大学)

なんともおもしろい本が出たものだ。ずしりとした手ごたえ、ページの端の索引マーク。まるで辞書か、学習参考書のようなものである。一体何について書かれているのだろうか。本書の原書は『21世紀中国文化地図』(朱大可・張閔主編、広西師範大学出版社) 第一巻(二〇〇三年十一月)、第二巻(二〇〇四年五月)である。その名が示すとおり、原書は、今日の中国における文化的状況をたどるための「地図」の役割を担おうとしている。第一巻で二〇〇一年と二〇〇二年、第二巻で二〇〇三年の文化事象を扱い、すでに第三巻も出版されている(二〇〇五年十月)というから、かなり長期的な見通しの上に立っているようだ。その範囲は、文学・美術・音楽・映画・テレビ・演劇・建築・メディア・流行、と幅広い。原書は「文化批評文選」「文化關鍵詞」「文化事件」の三つの部分に分かれているが、『チャイニーズカルチャーレビュー』(以下『レビュー』と略称)では「文化批評文選」は紙幅と著作権の関係で訳出されておらず、目録が付されているのみである。

『レビュー』の主な内容は、「文化事件」の翻訳である「カルチャー・レビュー」と、「文化關鍵詞」の翻訳である「カルチャー・キーワード」で、二つの章の順番は原書とは逆になっている。日本語版ではまず時系列に沿った大事記スタイルの「カルチャー・レビュー」を読みながら、細かく

トップページにもどる

朱大可・張閔主編／高屋垂希・千田大介監訳

『チャイニーズカルチャーレビュー』

——中国文化総覧』(vol. 1・2)

B5変判・三六八頁／三五二頁・好文出版・各二、九四〇円



付された記号にしたがって、関連する他の記事や、関連する「カルチャー・キーワード」に飛ぶことができるようになっていた。この「飛ぶ」感覚が実に楽しい。そもそも原書にはこのような「飛ぶ」機能がなく、ページの割付に何の工夫もされていないので、原書と『レビュー』の紙面を比べたとき、同じ内容の本とは思えないくらいだ。つまり、それだけ『レビュー』の作りは凝っており、読者の便宜をとことん追求しているのである。訳者や編集者の苦労がしのばれる。

さて読者はそれぞれの関心にしたがって、好きな分野、好きな年度から読み始めてかまわない。例えば「映画」なら、すでに日本人にもなじみ深い作品が多いので、いつ、何が公開され、どの女優が受賞したとか、具体的な事実にもついていきやすい。そして読み進めるうち、事実が淡々とあげられる中に、時折著者の辛らつな口調が見え隠れす

ることに気づく。例えば二〇〇二年十二月の項目にはこんな記事がある。

『HERO 英雄』、長期間にわたってメディアの最も熱い話題に。／同映画のプレミア上映は一日、人民大会堂で挙行されたが、批評界から激しい攻撃を浴びた。評論家によれば、同映画には大量の消化不良の模倣が満ちているという。黒澤明の『乱』、王家衛の『楽園の瑕』、陳凱歌の『始皇帝暗殺』などである。また張芸謀は同作の着想は『グリーン・デスティニー』以前だと一度ならず語っているが、刺客のゴビ砂漠から九寨溝へと向かうルートは、李安が『グリーン・デスティニー』で取った道筋（ゴビ砂漠から黄山へ）と軌を一にしている。また『グリーン・デスティニー』における章子怡と周潤発による竹林の梢の決闘は、『HERO 英雄』では楓林の闘いに置き換えられているが、木の葉の色が緑色から金色に変わったことを除けば、まったくのコピーである」（『レビュー』vol.1、一一八頁）。

なるほど、『HERO 英雄』が中国国内で不評だったというのは聞いたことがあり、個人的にも見たあとと不満が残ったのを覚えている。「大量の消化不良の模倣」という批評には納得がいくし、「言ってくれるじゃないか」と嬉しくもなる。

著者の筆は時に辛らつを通り越して、悪意すれすれのきわどさを見せることもある。二〇〇三年七月の項目より。

『ヴァンプ女優ベストテン』選出。／アメリカのNBCチャンネルが二四日、映画史上の『ヴァンプ女優ベストテン』を選出し、『グリーン・デスティニー』のイエン役の章子怡が落ち着きがあり、しつかりしていて、残忍であるという理由で四位に入った。彼女は、このアメリカ人の目にはオリエンタル・ビューティらしいが、国内の観客

▶ トップページにもどる

は納得しておらず、そのイメージは『バカで、ぼうつとしていて、愚かである』と言えるようだ」（『レビュー』vol.2、八六頁）。

『ヴァンプ女優ベストテン』は原書では「十大女狼角」、バカで、ぼうつとしていて、愚かであるは「傻、呆、蠢」との注がある。『レビュー』はこのように、訳文に記号を付けてこまめに原語と対照させてあるので、勉強にもなるし、味わいも深い。『グリーン・デスティニー』での章子怡は、確かに『初恋のきた道』とは打って変わってかわいくない女だった。その釈然としない思いが、「傻、呆、蠢」とバツサリ切り捨てるかのような批評によって、幾分慰められた気がした。

以上、一般の読者にもわかりやすい例をあげてみた。主要作品が海外でも紹介される「映画」分野とは異なり、「建築」「美術」「演劇」のような分野は、中国国内でなければ作品を目にするチャンスが少ない。だから批評の当否を判断することは難しいが、その分読者は主観に左右されることなく、著者の批評を一つの言説として楽しむことができるとも言える。

そうすると『レビュー』における批評が、一体誰によって、どのような立場で展開されているのが当然気になってくる。原書の主編（原著者）である朱大可・張閔の二人はいずれも上海師範大学人文学部の教授で、文化批評家として代表的な人物であるという。「カルチャー・レビュー」は分野ごと、「カルチャー・キーワード」はワードごとに署名があり、複数の著者によって分担されていることがわかる。監訳者の一人千田大介氏の話によれば、著者は主編の知り合いである批評家や新聞記者などで、指導する大学院生もいるという。主編の二人もペンネームを使って執筆

しており、したがって原書の論調は主編自身の立場に大きく拠っていると見ることができる。

原書の特徴を知るために手がかりとなるのは、朱大可・張閔の連名で書かれた「はじめに」である(『レビュー』vol. 1、二〇一二頁)。この文章は、一九八〇年代以降のインターネットの社会的役割の変化や、文化をめぐる言説の変化をたどりながら、新時代の批評のあるべき形を論じた興味深いものだ。著者は「学院エリート」による「国家主義との融合」を厳しく批判し、一方でメディア批評の商業性や大衆性に警鐘を鳴らす。その上で新たな批評の形態としてインターネット上の言説に注目するのである。実は、本書には明確に書かれてはいないが、主編の二人をはじめとする著者たちは、普段インターネットを批評活動の舞台にしている節がある。朱大可・張閔は、「現在、インターネットで流行しているハーバマスの『公共圏』学説」に言及しながら、インターネットこそが、権力に拠らない独立した個人にとつての自由な言説空間になりうると主張したいらしい。

二〇〇三年のSARS流行で明らかになった政府の情報統制、それに反比例して盛り上がったネット世論とその効用については、『レビュー』vol. 2の「訳者まえがき」に詳しい(同書v-vi頁)。社会の一大危機においてインターネットが果たした役割が、著者たちを励まし、原書を世に出す原動力になったのではないかと、訳者は指摘する。

このような著者たちのインターネットに対する期待感、メディア事情の異なる日本の読者には理解しにくい部分もあるだろう。インターネット上の「自由」が容易に「無責任」に転化すること、その匿名性が犯罪や反社会的行為に利用されることは、日本社会ですでに常識となつていくからだ。逆に、それらの危険性を割り引いた上で、なお

トップページにもどる

信頼に足る言説空間が構築されうるのかどうかは、日本社会でも「まだ」実験途上というべきなのではないだろうか。評者は普段メールのやりとりと本の検索以外にはほとんどインターネットを利用していない。最近中国の知人(退職老年女性)が嬉々として「私の博客(ブログ)を見て!」と知らせてよこしたので、仕方なく見てみた。他愛もない日記や旅行記の中に、ちらりちらりと彼女が関わる文芸界への不満や批判めいた言葉が書かれている。つまりこれが朱大可・張閔の言う「民間」――「非国家主義の言説が誕生する主要な言説空間」(『レビュー』vol. 2、六頁)なのだろうか。名もなき市民がインターネットによって表現の場を得たことの意味は、日本と中国とでは重みが全く異なる。朱大可・張閔は原書の編纂を「二種詩経、国風」的なテキスト採集作業」(同、九頁)と自ら称したが、その意義を認め翻訳出版を決意した監訳者の慧眼は賞賛されてよいと思う。

最後に繰り返すが、読者はそれぞれの関心にしたがって、本書をどのように利用してもかまわないのである。「カルチャー・キーワード」を流行語辞典として使ってもよい。「小資(プチブル)」のキャリアウーマン(白領麗人)がバーやカフェに入り浸り(泡吧)、カプチーノ(卡布奇諾)のカップを傾けている姿を想像してみよう。また本書は、日本や韓国のカルチャーがどれほど今日の中国に影響を与えているかの資料にもなる。木村拓哉が日本ドラマ(日劇)『ロング・バケーション(悠長假期)』を通じて、「年上女性との恋愛(姐弟恋)」の手法として中国大陸でもブームを起こした、なんていうのを読んでニマリしてもいい。

何より、本書は我々日本人が断片的にしか知らなかった事実「意味」を与えてくれる。本書の出現は、二一世紀

▼『東方』300号より

四 文化を横断するための画期的「地図」

▲ 榎本 泰子

の中国文化を構成するさまざまな事象を自在に横断し、
人々の暮らしや思考を追体験することを初めて可能にした
と言っても過言ではない

[トップページにもどる](#)

▲ 東方書店